



*Meijo University*



# 新型コロナウイルス流行下の救急活動に関する調査2021

—調査結果速報—

畑中 美穂

(名城大学教授)

秋本 陽子

(NPO法人日本消防  
ピアカウンセラー協会理事)

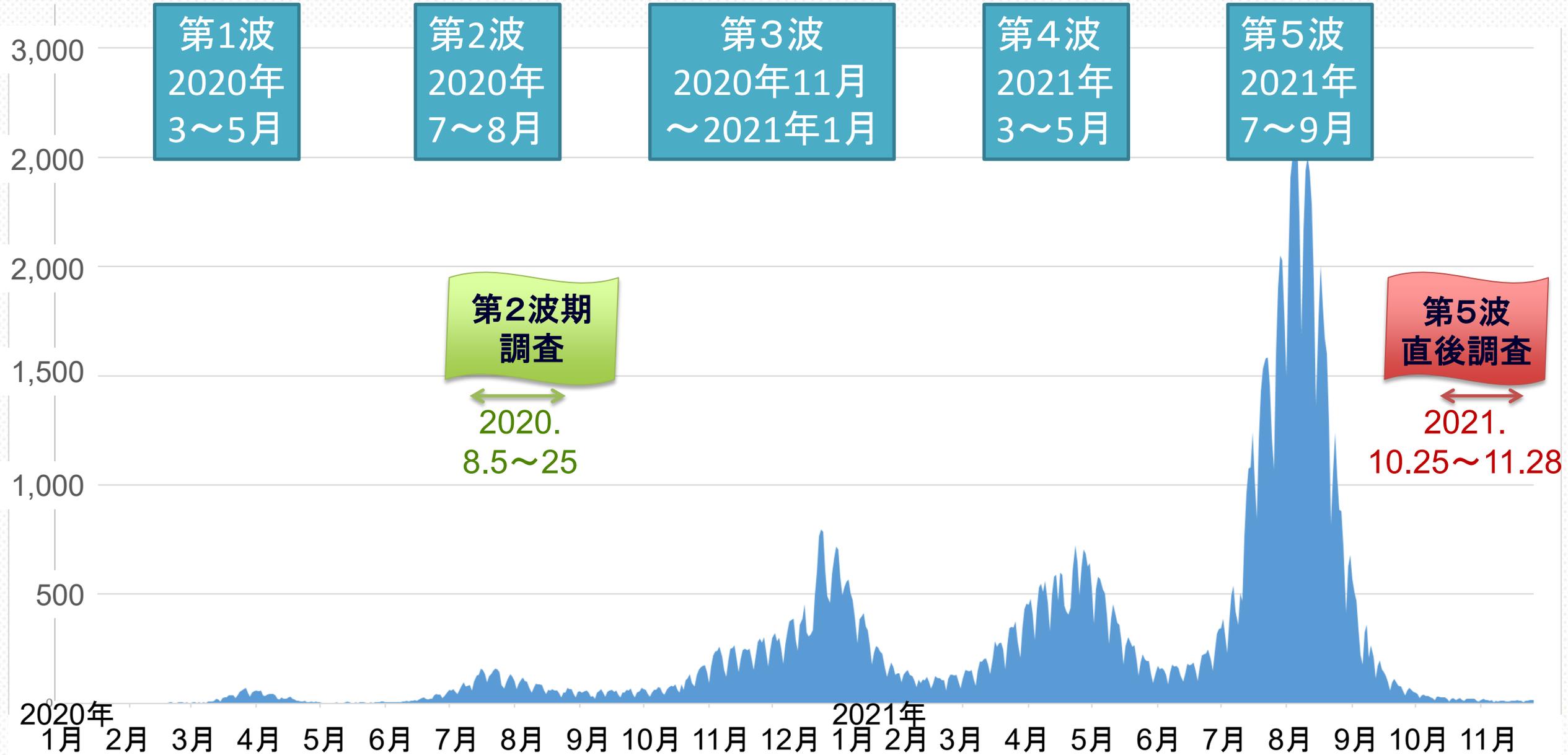
松井 豊

(筑波大学名誉教授)

注: 本研究は、令和3年度丸茂救急医学研究振興基金助成、および、2021年度ユニバーサル財団研究助成を受けました



# 新型コロナウイルス感染者数の推移(1日ごとの報告数)



# 第2波期(2020年8月)調査の結果

## 新型コロナ対応に起因する救急活動の負担

- 感染防護資機材の不足
- 現場活動の長時間化
- 感染に対する不安(自身、同僚、家族)



# 本調査の研究背景

- 新型コロナウイルス感染拡大 → 救急活動の負担増
- 直近の第5波では搬送困難事例が増加
- 流行から2年弱経過し、現場での対策が進んでいる可能性

➡ 第5波収束時点で、消防職員の負担が軽減されているか、  
どのような課題が残されているか、検証が必要



# 研究目的

- 本年4月以降、流行第5波までの救急活動を振り返って、新型コロナウイルスの流行（「新型コロナ禍」）によって生じた救急活動の変化と救急隊員のストレスを検討
- 第2波期（2020年8月）調査の結果と比較し、救急現場が抱える課題を明らかにする

→本速報では、その結果の一部を報告



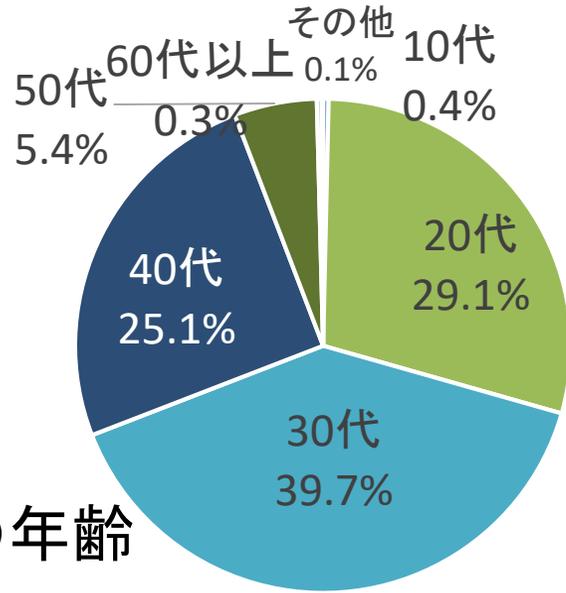
# 調査の概要

研究者の知己のネットワークにより、  
消防機関の協力も得て、対象者の  
条件に該当する全国の消防職員に  
調査参加を依頼

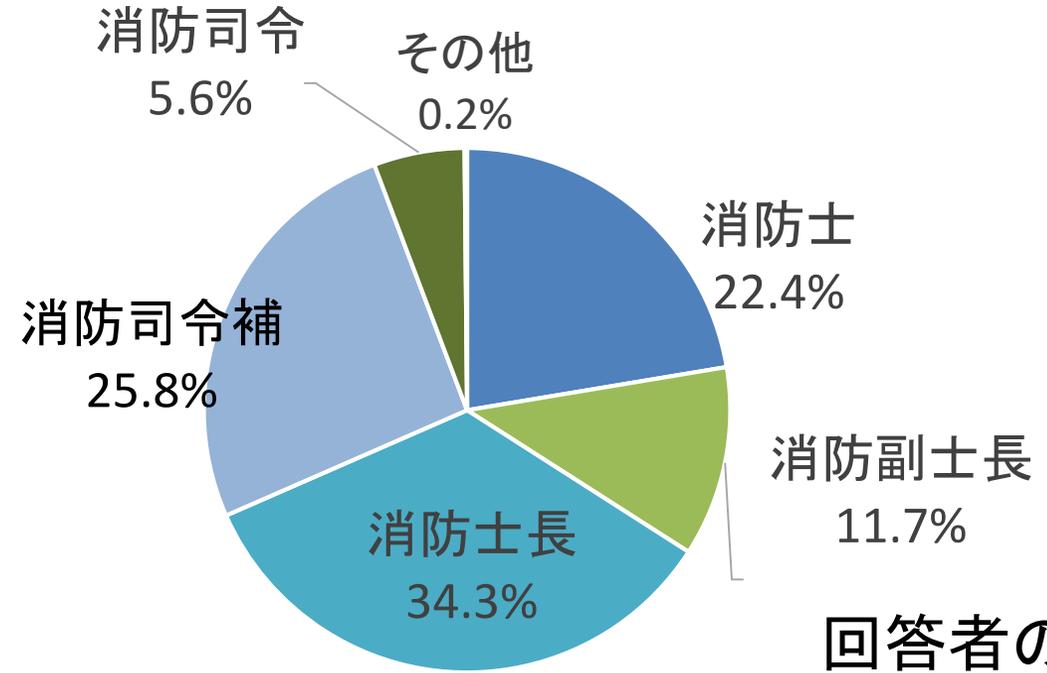
- 機縁法で全国の消防職員に調査協力を呼びかけオンライン調査を実施
  - 回答収集期間：2021年10月25日～11月28日
  - 有効回答者数：1965名
    - 2244名の回答のうち、回答を最後まで完了し、本年4月以降の救急出場頻度が「月1回以上」の方を分析対象に。



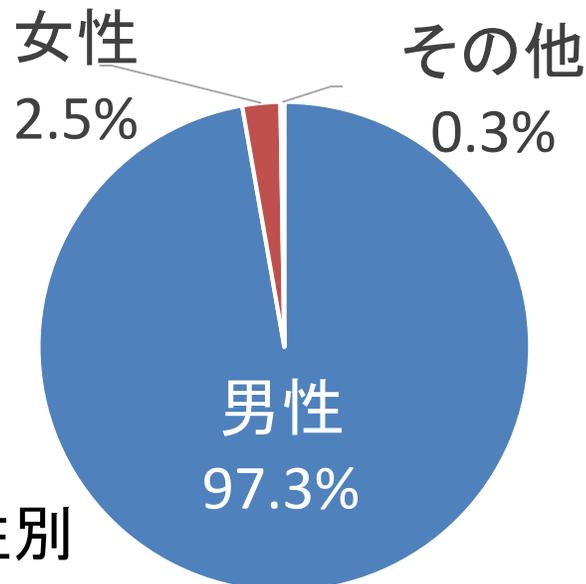
# 有効回答者の属性



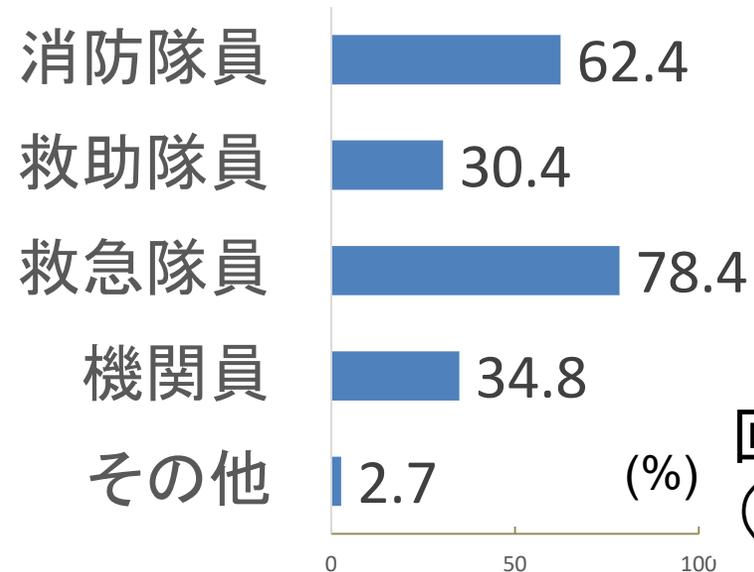
回答者の年齢



回答者の階級

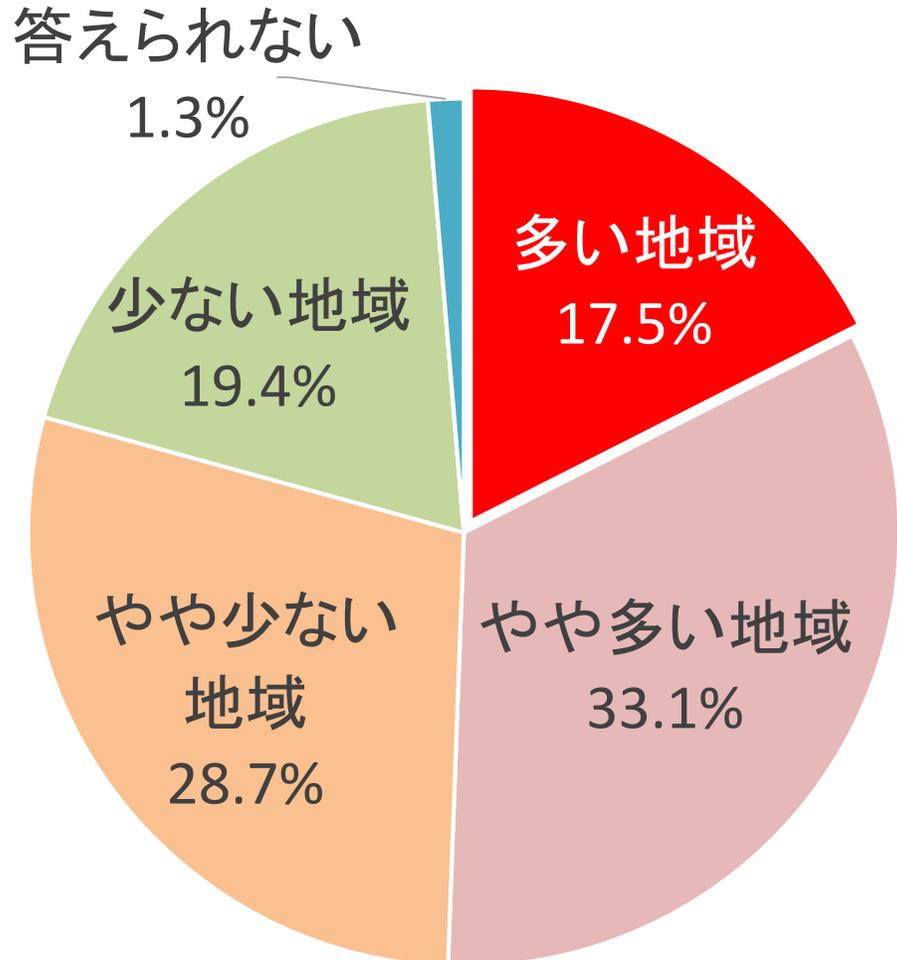


回答者の性別



回答者の職務  
(多重回答)

# 有効回答者の属性〈感染状況別にみた所属本部の地域〉



- ◆ 8月初旬までに緊急事態宣言発出：  
「**感染者の多い地域**（東京・大阪・埼玉・千葉・神奈川・沖縄）」
- ◆ 8月下旬までに緊急事態宣言発出：  
「やや多い地域（茨城・栃木・群馬・静岡・京都・兵庫・福岡・北海道・宮城・岐阜・愛知・三重・滋賀・岡山・広島）」
- ◆ 9月1日時点で蔓延防止等重点措置を実施：  
「やや少ない地域（石川・福島・熊本・富山・山梨・香川・愛媛・鹿児島・高知・佐賀・長崎・宮崎）」
- ◆ 上記以外：  
「少ない地域」



# 結果 —活動中の体験—

ゴーグルやフェイスシールドが曇るなど、感染防護装備のために、活動がしにくかった

傷病者に発熱があるだけで、感染リスクや新型コロナ対応の消毒などを考えなくてはならなかった

自宅待機になったら、周囲に迷惑がかかると思った

すべての事案に対して、新型コロナ対策をとって出勤しなければならなかった

感染を判断する基準から外れている傷病者でも、感染しているのではないかと思った

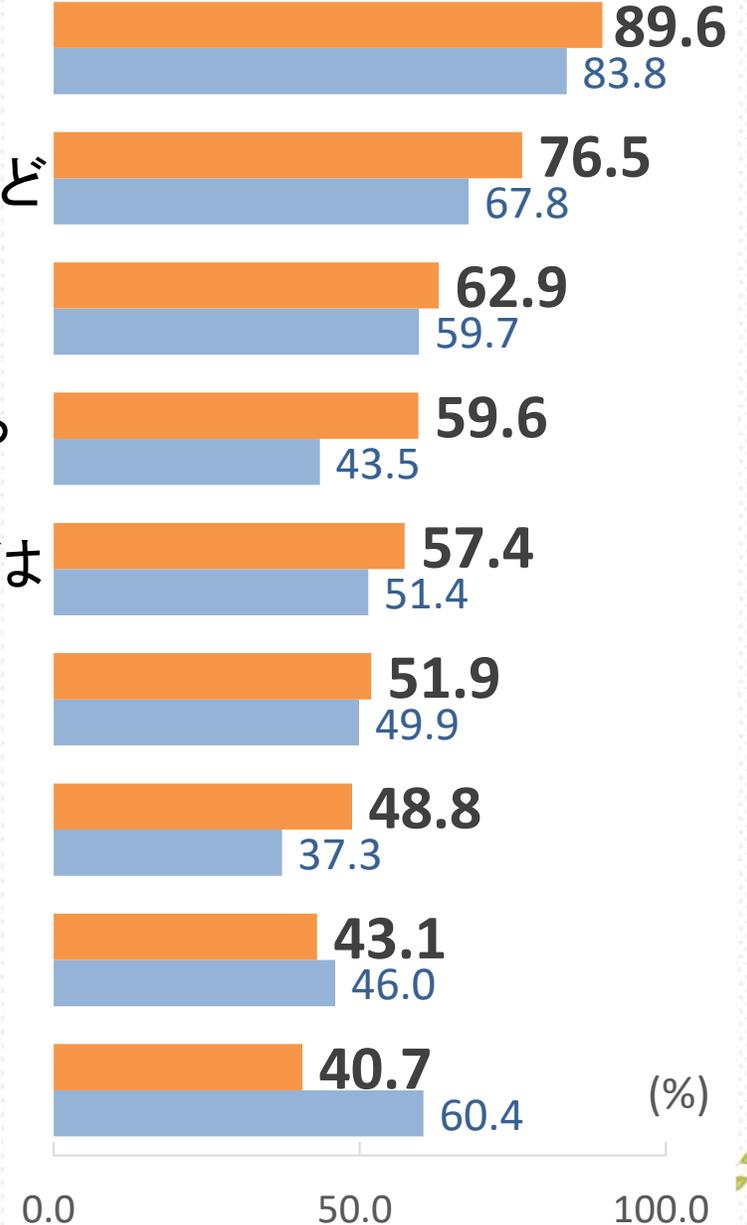
感染防護衣での活動は暑くて、体調管理が難しかった

感染防護の着装のために、活動開始が遅れた

活動した隊員が不安を感じた

感染防護資器材(マスク、ゴーグル、感染防護衣など)の追加納品が難しいことから、それらの在庫状況に不安を感じた

第五波直後調査 N=1965  
第二波期調査 N=2204



# 消防職員の自由記述から

## 〈コロナ禍における救急活動の負担〉

- 装備についても、使い捨てのディスポの防護衣を洗い、破れるまで使用しています。国が小さな消防本部にまで財源をしっかりと振り分ける財政措置を希望します。
- 感染防護関係の資機材の在庫が少なすぎた。傷病者が陽性でないかぎりボロボロになるまで感染防護服やマスクなどを使い続けざるをえなかった。



# 活動中の体験のまとめ

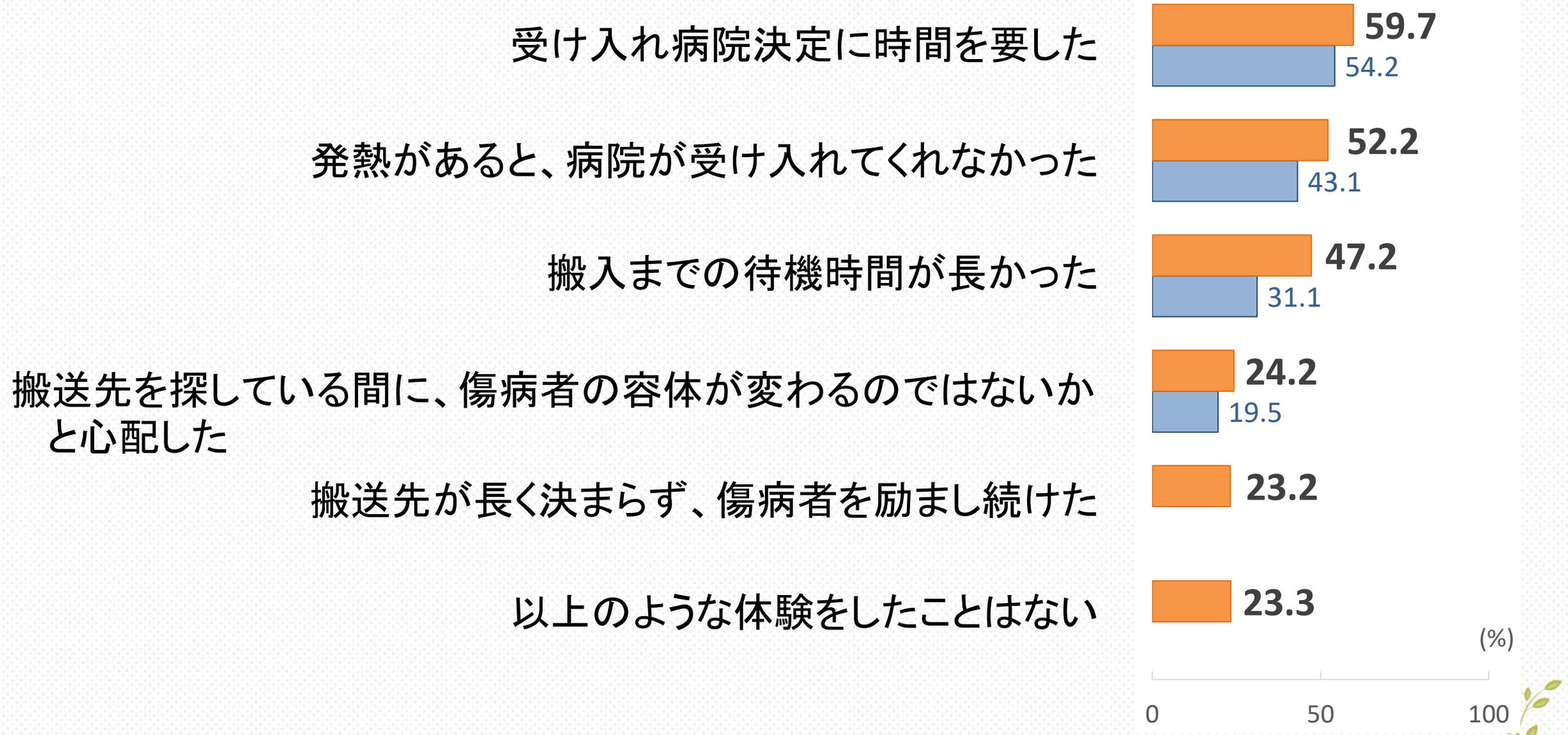
- 新型コロナウイルスの流行から2年近く経過した第五波直後においても、救急現場の負担は軽減されていない。
- むしろ、全体的に第二波期に比べて大きくなっている傾向。
- 資器材の確保は改善傾向にあるが、依然として資器材不足に不安を抱えている消防職員が4割程度。  
(本部によっては、使い捨てのものを使いまわしている現状)



# 病院選定时・搬送に関わる体験

第五波直後調査 N=1965

第二波期調査 N=2204



# 消防職員の自由記述から

## 〈搬送の長時間化〉

- 発熱があるだけで、たちまち近隣医療機関が受け入れを拒否しはじめた。そのため、現場滞在時間がかなり長くなり、出場件数は全体的に減っても、負担はかなり増えました。
- 病院が決定するまで、本人の部屋から出られないため、防護服で大変暑く、立ちっぱなしで、長時間その人と同じ空間にすることで、感染リスクも高い状態でストレス度が高かった。



# 病院選定时・搬送に関わる体験のまとめ

- 病院選定と搬送に関わる問題は、第二波期と比較して全体的に増加
- 病院が決まらなかったり、遠くの病院への搬送したりするため、活動が長時間化

→心身の負担、感染リスクの増加



# 結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

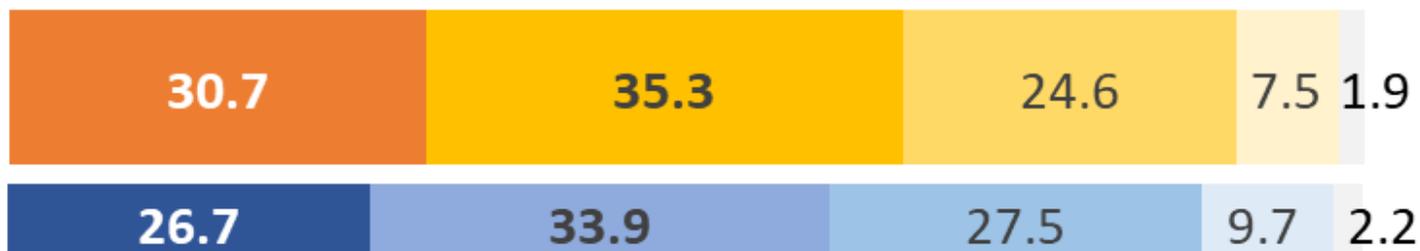
第五波期調査: N=1957—1965

第二波期調査: N=2145—2200

■ 強く感じた    ■ 感じた    ■ 少し感じた  
■ あまり感じなかった    ■ 全く感じなかった

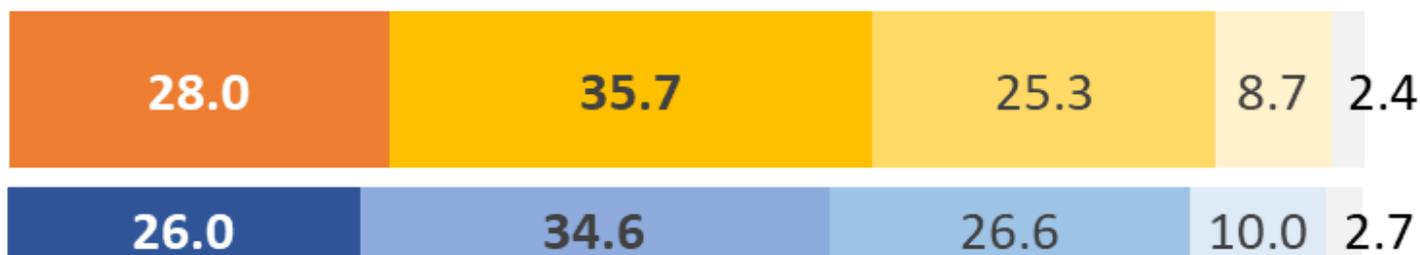
自分が新型コロナに感染する  
かもしれないという不安

〈第二波期調査〉



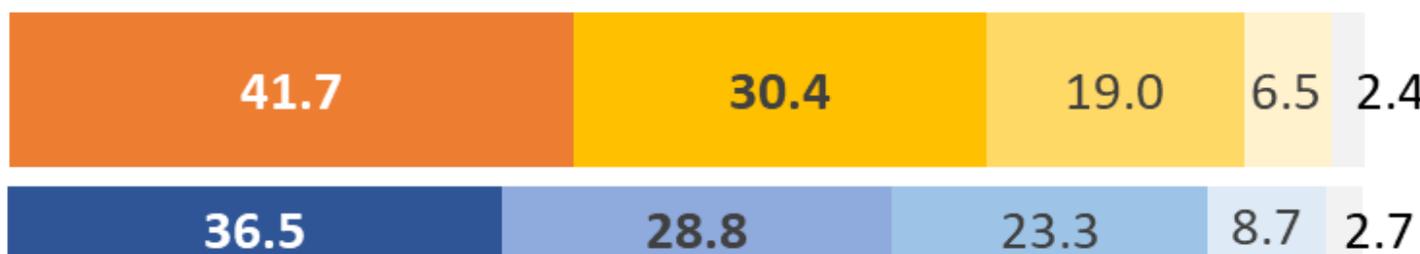
隊員を感染させるのではないかと  
いう不安や申し訳なさ

〈第二波期調査〉



自分を介して、家族を感染させる  
のではないかと不安

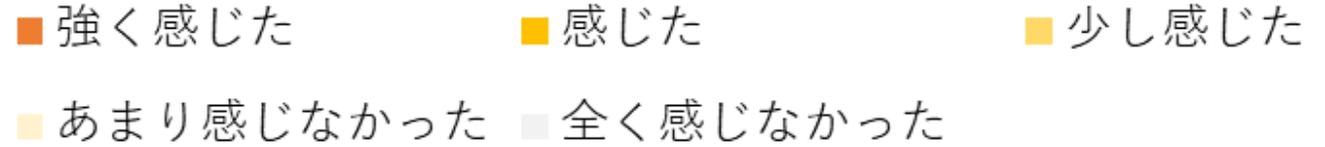
〈第二波期調査〉



# 結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

第五波期調査: N=1957—1965

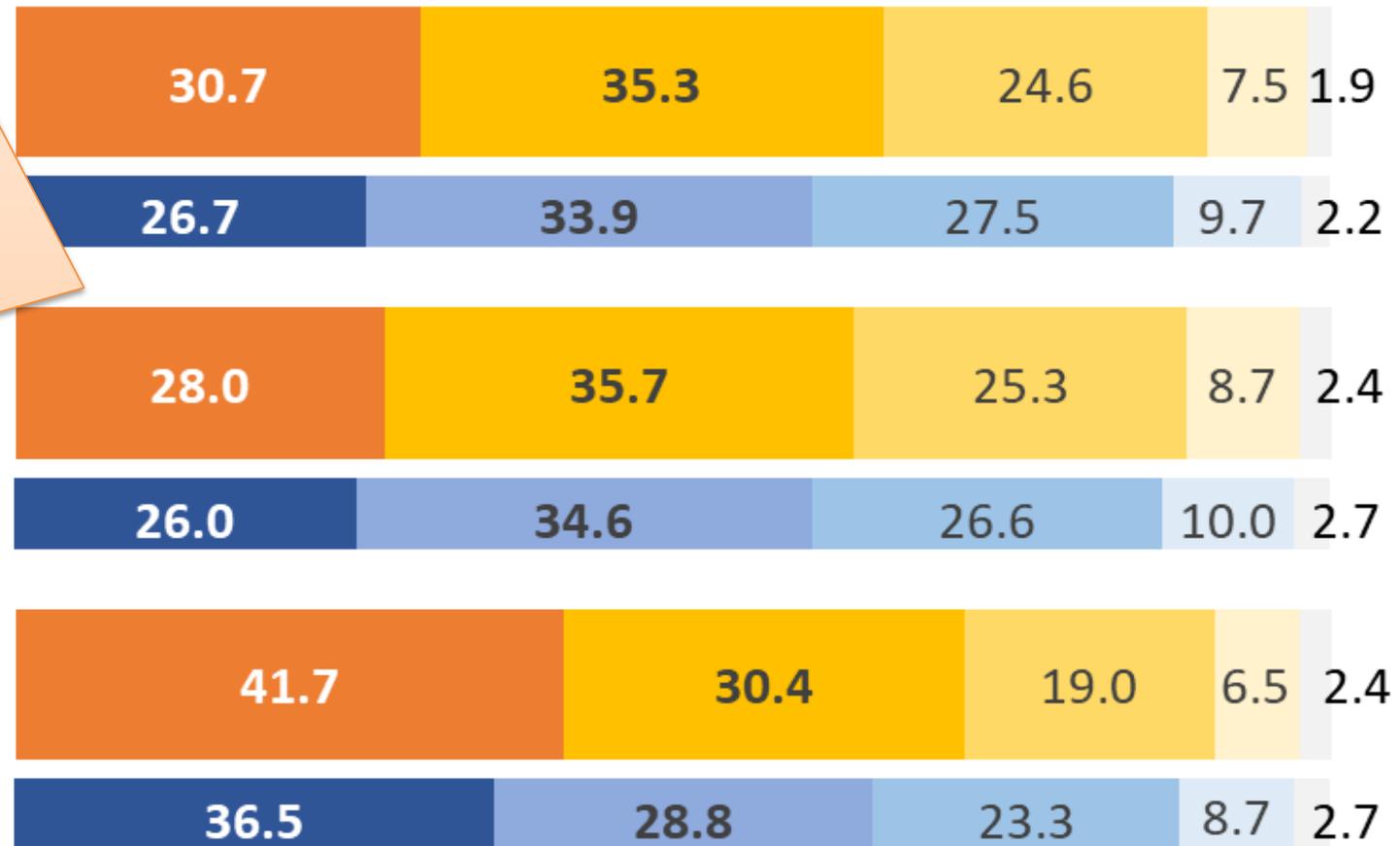
第二波期調査: N=2145—2200



・第二波期よりも増加傾向



長期化する新型コロナ禍において、  
自分自身への感染不安だけでなく、一緒に活動した隊員や家族への感染不安を抱え続けながら活動

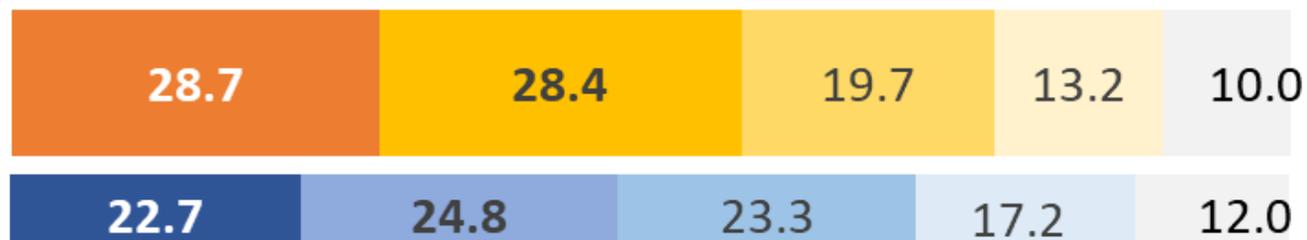


# 結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

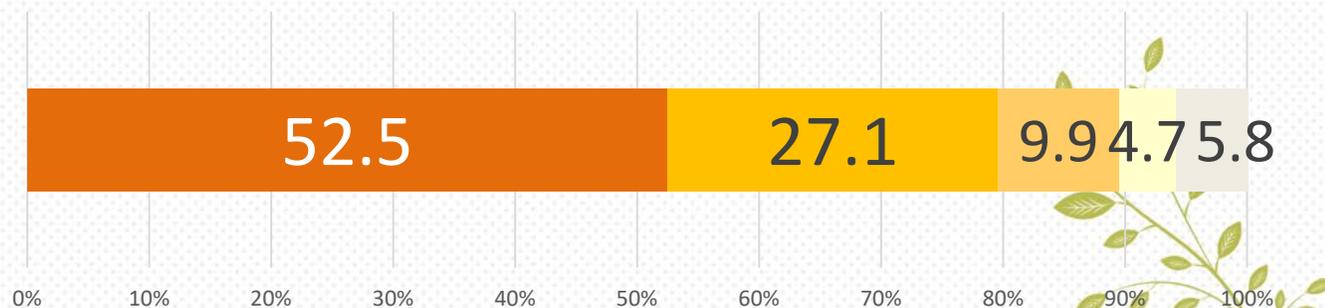
■ 強く感じた      ■ 感じた      ■ 少し感じた  
■ あまり感じなかった      ■ 全く感じなかった

受け入れ病院決定までに時間を要することがストレスになった

〈第二波期調査〉



感染者が多い地域の結果 〈第五波調査〉

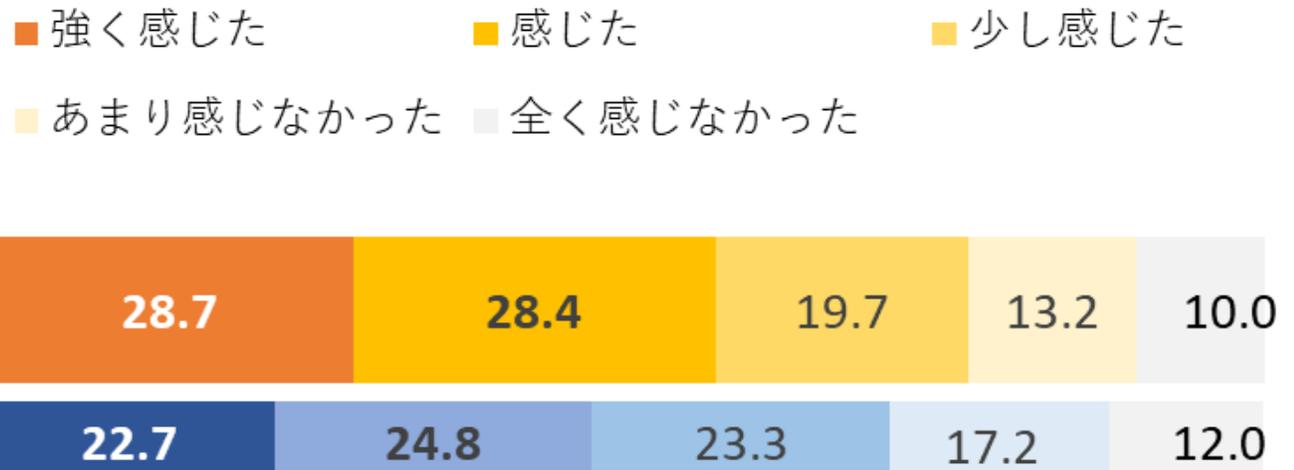


# 動に関わる不安やストレスー

- ・病院選定と搬送に関わるストレスは昨年よりも悪化
- ・感染者が多い地域において特に強く感じられている

受け入れ病院決定までに時間を要することがストレスになった

〈第二波期調査〉



感染者が多い地域の結果 〈第五波調査〉

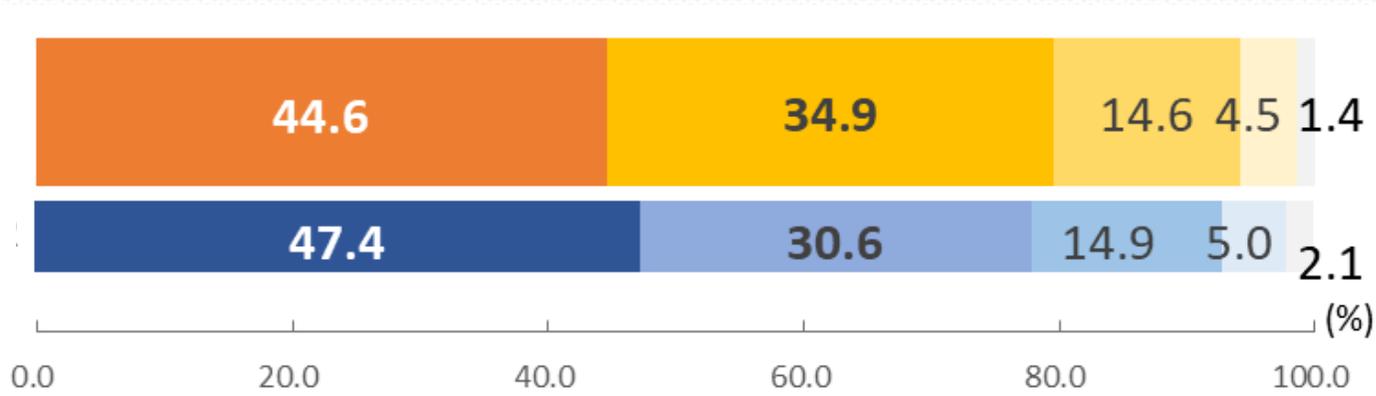


# 結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

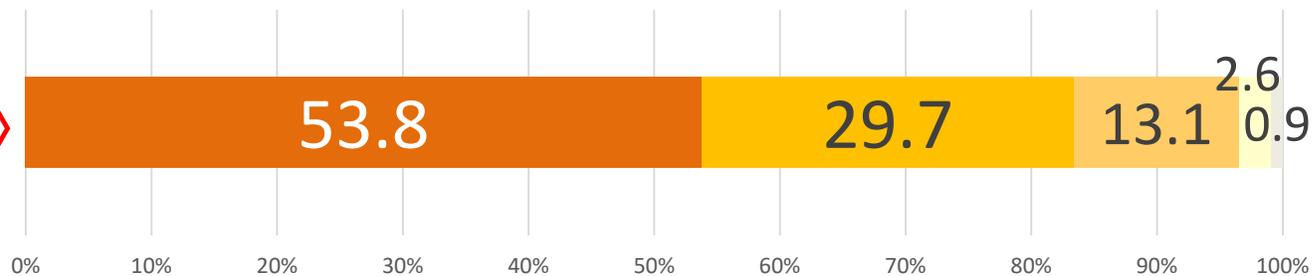
- 強く感じた
- 感じた
- 少し感じた
- あまり感じなかった
- 全く感じなかった

感染防護衣での活動が、暑さや動きにくさで、つらかった

〈第二波期調査〉



感染者が多い地域の結果〈第五波調査〉



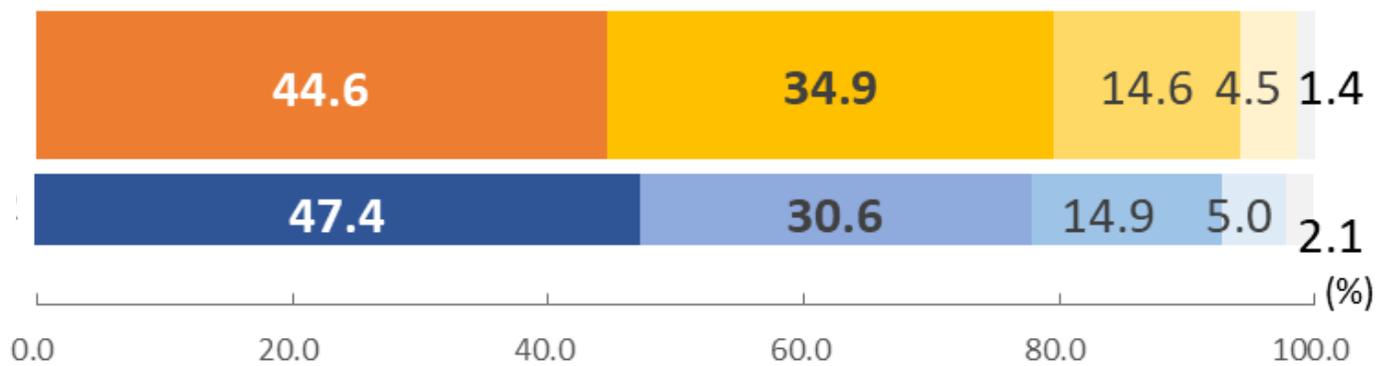
# 活動に関わる不安やストレス

感染防護衣による負担は  
昨年から改善されていない

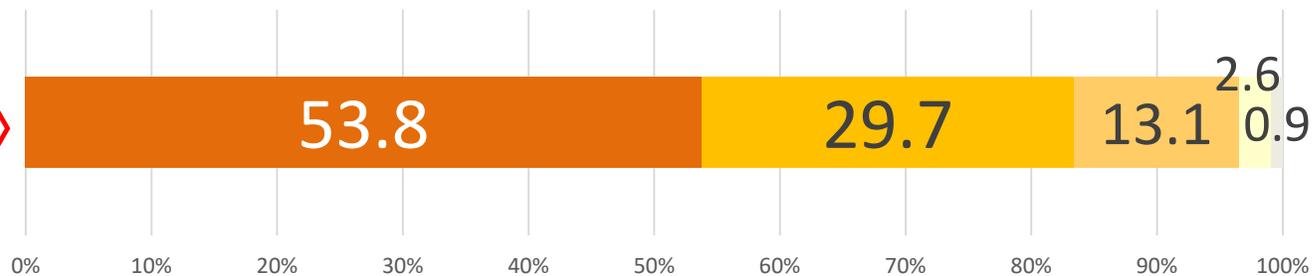
感染防護衣での活動が、暑さや  
動きにくさで、つらかった

〈第二波期調査〉

■ 強く感じた      ■ 感じた      ■ 少し感じた  
■ あまり感じなかった      ■ 全く感じなかった



感染者が多い地域の結果〈第五波調査〉

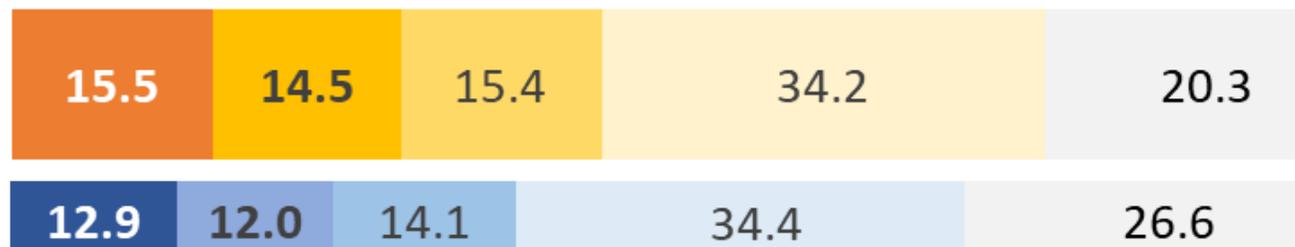


# 結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

■ 強く感じた      ■ 感じた      ■ 少し感じた  
■ あまり感じなかった      ■ 全く感じなかった

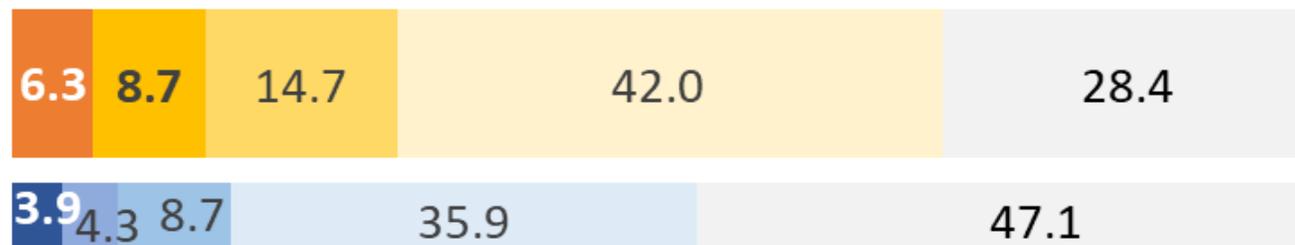
新型コロナの流行下の活動に理解がない上司に、不満を感じた

〈第二波期調査〉



周囲の人、一般の人からの心ない言動や差別的な対応がストレスになった

〈第二波期調査〉



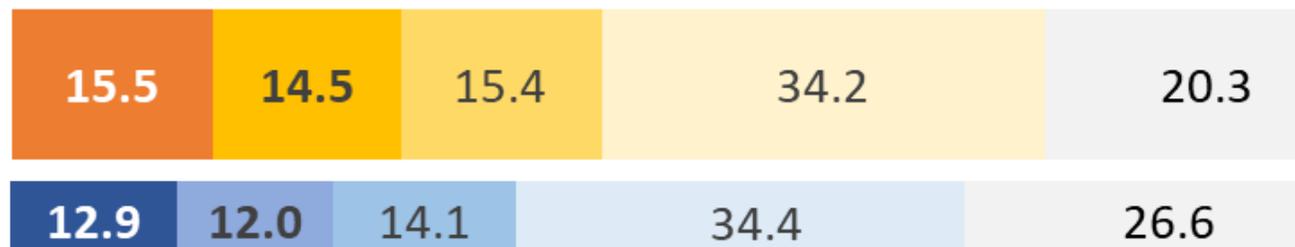
# 活動に関する不安やストレス

第二波期から増加していた

■ 強く感じた      ■ 感じた      ■ 少し感じた  
■ あまり感じなかった      ■ 全く感じなかった

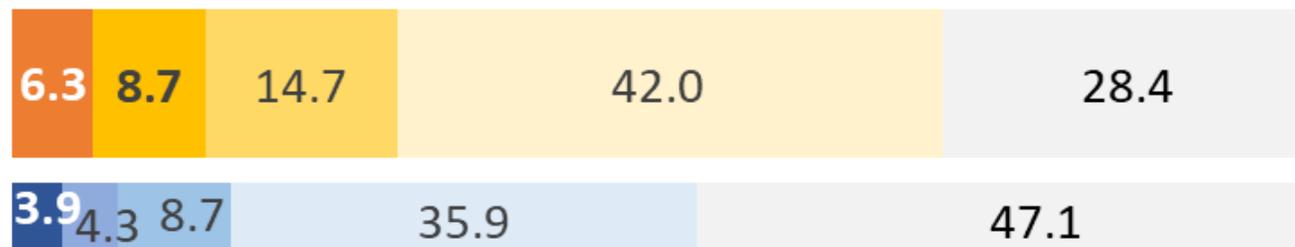
新型コロナの流行下の活動に理解がない上司に、不満を感じた

〈第二波期調査〉



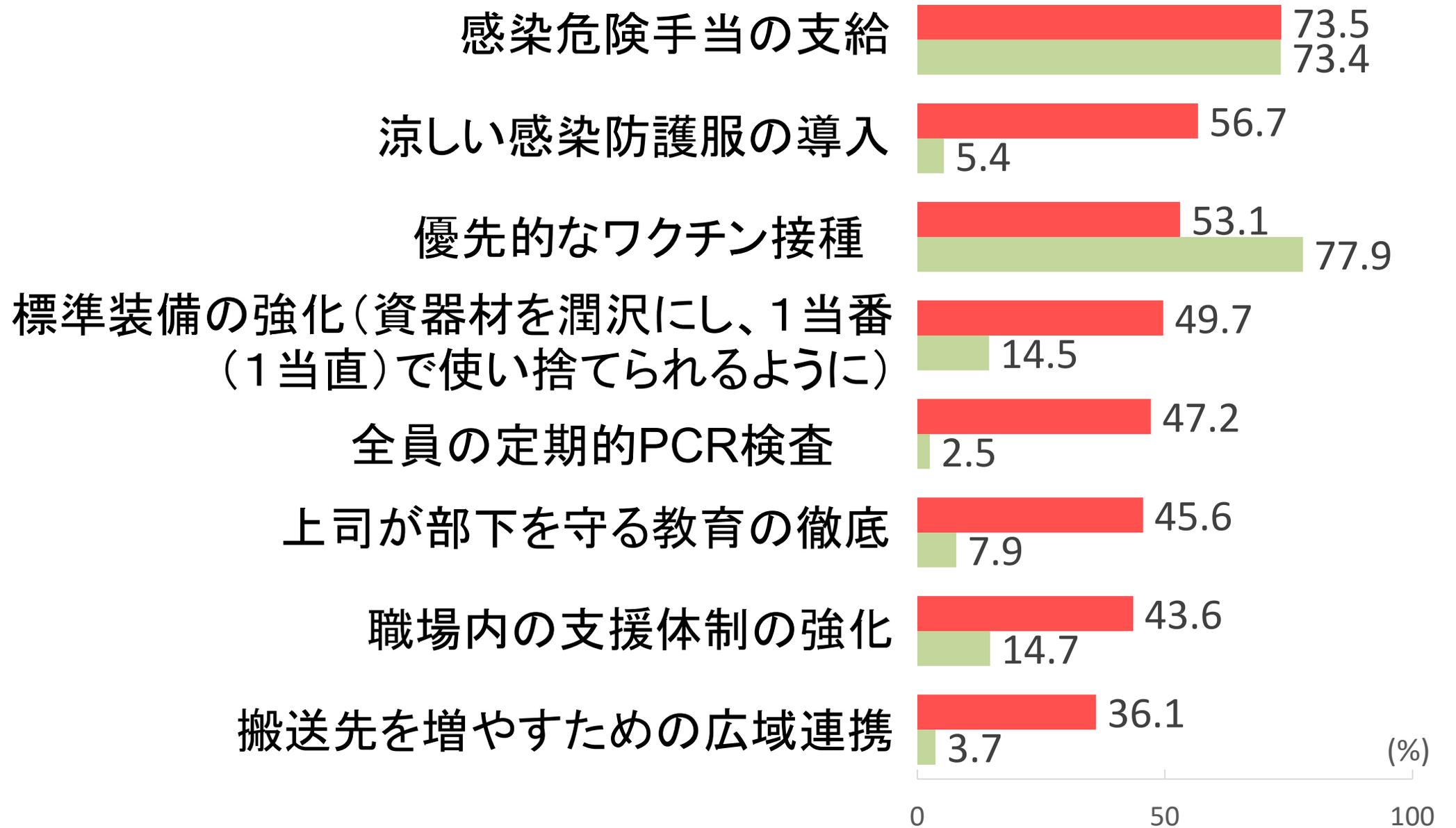
周囲の人、一般の人からの心ない言動や差別的な対応がストレスになった

〈第二波期調査〉



# 必要な対策と実施状況

■ 必要な対策 ■ 実施されている対策



# 消防職員の自由記述から

## 〈感染危険手当の不十分さ〉

- コロナ感染者を搬送する際の手当てが、1回搬送しても10回搬送しても3,000円というのは、おかしいと感じる。
- 医師、看護師、介護士などには、手当てももらえているし、感謝されている。我々救急隊は、どうしても運ぶだけのイメージが取れないのか、あまり感謝もされず、手当ても、何件扱おうが1日一件分しか手当てがでず、しかも、記録票に医師がコロナと書いてくれないと、手当てももらえない。
- 救急隊員がコロナ対応を行った医療従事者と同等の手当等してもらえないのは遺憾です。



# 消防職員の自由記述から

〈救急活動に関する関心と理解の乏しさ〉

- 救急隊が医療従事者として扱われなかったことが一番ストレスに感じた。というのも、医療従事者に対して慰労金が出たにも関わらず、救急隊員は除外された。……ワクチンにしても、医療従事者枠と言いながらも我々が接種したすぐ後に高齢者の接種が始まった。結局は医療従事者枠の最後の最後だった。こういうところを踏まえて、我々救急隊員の立場が低いことを痛感させられた。それがものすごいストレスに感じた。
- 病院ばかり手厚く手当を支給するのではなく、救急隊員にももっと手厚く対応してほしい。もっとも密な状況下で活動するのは救急隊員だから、そこはないがしろにしないでほしい。



# 必要な対策と実施状況のまとめ

- 職員が必要としている対策があまり実施されていない現状
- 「感染危険手当」は、すでに7割以上実施されてはいるものの、自由記述では、活動と手当の不釣り合いに関する訴えや、さらなる手当の充実を求める声が多い。
- 「ワクチンの優先接種」は、実施率は8割弱と高いが、自由記述をみると、医師・看護師等の医療従事者と比べて冷遇されていることを訴える声が見られる。



# 提言

- ① 感染防護資器材の改良・充実
- ② 病院選定と搬送に係る負担の解消
- ③ 感染危険手当でのさらなる充実
- ④ PCR検査とワクチンの優先接種
- ⑤ 救急活動に携わる消防職員の立場の向上  
一般の方も救急活動に理解を



調査実施にあたり、多くの消防関係の方々に  
ご協力をいただきました。記して謝意を表します。

